

裾野麗峰山の会・山行報告書	文・I K	写真・G T
山行NO. 1859		
日時 2020/3/21 (土) 晴・強風		
山域 八ツ・硫黄岳 (2742m)		
コース 赤岳山荘発 7:58ー赤岳鉱泉 9:50ー赤岩ノ頭 11:40ー硫黄岳山頂 11:55ー昼休憩 12:30 ~12:50ー赤岳鉱泉 13:20ー赤岳山荘駐車場 15:05ー道の駅「延命の湯」ー長泉 19:30		
累計標高差 上り 赤岳山荘約1695m~硫黄岳2741m=約1046m 下り 同上		
快適度 (5段階評価) 5		
参加者 後藤、加藤、勝又、合谷、井上=5名		

後藤さんと加藤さんは前日乗り込みで、スキー場に雪があればスキー訓練の予定だった。しかし今年の暖冬のせい、近年の地球温暖化のせい雪は少なかったという。

残る3人は当日入り。竹沢種苗店前で 5:05 に勝又さんの車に乗り、裾野で合谷さんをピックアップ。6:30 時ごろ、加藤さんから電話連絡が入り、美濃戸の先の道が凍結しているので美濃戸に駐車し歩いてくることとのこと。後藤さんの車が、凍結のため滑り後続車にぶつかる事故があったとのこと。第2報では、チェーンがあれば上がれるとのこと、幸い勝又さんの車は、4WD+スタッドレスタイヤ+チェーンのフル装備で一安心。美濃戸からの余計な1時間歩きをしないで済んだ。



赤岳山荘



駐車場

美濃戸に入ってチェーンをつける。下りてくる車が、凍結や事故の事を教えてくれた。道路は深い轍と大きな穴ぼこが多数で、車はテーマパークの乗り物のように激しくバウンドする。

車高の高めホンダベゼルでも数回底を擦った。道の途中で左手に後藤さんの車が停めてあった。赤岳山荘に着いて駐車場 1000 円を払うと、山荘から後藤さんが現れた。駐車場には車が8割ほどあった。駐車場で支度をして出発 (7:58 1695m)。

過去に上った赤岳は、ここから右に入る南沢方面だが、今日は左の北沢方面に行く。道は氷で覆われ



赤岳鉱泉・通称「アイスキャンデー」

て滑るため、道の端の雪が残っているところを選んで歩く。沢に沿って行く。沢には氷と水が同居している。氷が解けない温度で水が流れている。道の傾斜はゆるいが息が切れる。

林道終点の橋の手前でアイゼンをつける。ここで事件。加藤さんがアイゼンを車に置いて来てしまった。合谷さんが持ってきていた6本歯の軽アイゼンを加藤さんがつけることになった。

後藤さんは12本歯のアイゼンを2つ持ってきていて、1つは合谷さんがつけた。私はあいかわらず重い革の冬靴に「一本締め」の重いアイゼン。これで片足に1.9kgつけていることになる。

「はあー」。足に重りをつけて歩いている感覚だ。アイゼンをつけるとアイゼンの歯が雪や氷に食い込み、滑りを心配しないで安心して歩ける。

時々渡る幅の狭い橋には50cmくらいの雪が積もっている。9:50 赤岳鉱泉着。ここまで2時間で約500m登った。巨大アイスキャンデー登場。氷がしだれ桜のようだ。まだ誰も登っていない。テントが20張位見える。人が多い。山ではコロナウイルスは関係ないとみえる。

カップの上着を着る。手袋は3層目のミトンをはめる。ここから山に入る感じ。徐々に傾斜がついてくる。加藤さんは軽アイゼンのため、いけるところまで行き、ダメと判断したら引き返すため最後を歩く。12本アイゼンに慣れていない合谷さんが転ぶというより後ろに「ストーン」と倒れた。すってんころりと見事に転ぶので感心すらする。柔軟に転ぶので怪我一つない。



赤岩ノ頭の厳しい上り



しかし、転ぶ場所によっては最悪の事もありうる。そのため、後藤さんから、行けないようだったら加藤さんと引き返すよう、後方を歩くよう指示がでた。

やがて傾斜が強くなるとジグザグのつづら折りの道になる。一定のペースで息を切らせ登り続ける。背後の樹々の間に赤岳と阿弥陀岳の姿が見える。大勢の若い人が下りてきて、シリセード（お尻で滑り下りる）を指導していた。



赤岩ノ頭（本沢温泉から来た若い単独男性に撮って貰った）

2550m くらいで森林限界を超える。そこから残りの 100m が直登で壁に見える。すれ違いで下りてくる人が、「ここが最後の難関です。がんばって」と声を掛けてくれた。深い雪にピッケルを「えいっ」と刺し、ぐいぐいと体を持ち上げる。息が切れず、ジャングルジムを登るようで楽しい。時々、背後の大パノラマをみては、「すごーい」を何度も言った。

11:40 急斜面を登り切り、赤岩ノ頭に出た。目の前に大雪原が広がった。加藤さんはこれ以上の岩場は軽アイゼンでは無理と判断し下ることにした。合谷さんは、今回が初めての本格雪山デビューだったので、頂上まで行きたかったが、強い風・アイスバーンで今回はあきらめて貰い、加藤さんと下山することになった。強風対策でバラクラバ（目出帽）をかぶり、サングラスをゴーグルに替えた。

後藤さんと勝又さんもストックをピッケルに変更。戦闘モードって感じでワクワクする。岩場に入る。ザックが強風にあおられ体を持っていかれそうになる。緊張感を維持する。岩の表面にアイゼンの歯が当たりガチャガチャと音を立てる。雪がないとアイゼンは登りにくい。

下山してくる中に子どもの姿が見えた。ザイルに繋がった若い女性もいた。頂上に近づくにつれ風が強くなってくる。何か小さな粒が顔にぶつかってくる。氷の粒か、砂か？

11:55 頂上にたどり着き、後藤さんと握手。風と格闘し、無事に登頂し達成感ひとしお。少し遅れて勝又さん登頂。3人で握手。こういう厳しい環境での登頂は、冒険をした感じがして感激する。



硫黄岳頂上（モーレツな風が吹く）



Kさん

どんどん風が強くなってくるので早々に下山を開始。下りも緊張感をもって慎重に下りる。岩場を下り切ったところで単独の女性とすれ違う。ダブルストックの先にゴムキャップがついているので、後藤さんが注意をしたが、「何度も来ているので大丈夫です」の返事。

ゴムキャップでは硬い雪や氷に刺さらないし、ダブルストックでは両手がふさがり、いざという時





地獄から帰還



昼食

手が使えないので危ない。(基本的でない)

赤岩ノ頭から再び登ってきた急登を下る。斜度が50度くらいに見えるが、後藤さんはそんなにないという(翌日地形図で確認すると、この斜面は垂直高さ100mで水平距離90mなので約30度だった)。下



Gパパ



赤岳鉱泉

りでは、登りで振り返って見た大パノラマを正面に見る。

風よけの樹林帯に入りすぐに昼休憩とした（12:30～12:50）。カップヌードルにお湯を入れ、下りの歩行を心配してビールを飲むか迷っていたら、勝又さんが「迷ったら飲む！（プシュッ）うまい！」と先陣を切った。続いて遅れまいと後藤さんと私がプシュッ・プシュッ！「あーうまい」。疲れた体には、ビールとカップヌードルで十分満足した。20分の休憩後、早々に下る。どんどん下る。シリセードが多数あり、道が分かりにくくなっている。

13:20 赤岳鉱泉到着。加藤さんと合谷さんが二人並んで巨大アイスキャンデーでアイスクライミングをする人たちを眺めていた。2人はここで昼食をとったとのこと。ここで加藤さんが「甘酒とおしるこ」を作ってくれた。温かく甘いものが疲れた体にうれしい。いただいた「甘味がんも」がおいしかった。アイスキャンデー前で写真を撮って貰い下山再開。雪が登山道を覆い、どこに足を置いてもよいので楽ちん。沢の岩の横腹に不思議な氷を見た。

氷の縦のひだ。縦50センチ、幅20センチの薄い板が10枚くらい狭い間隔で並んでいて、これを見た加藤さんが、「きのこの裏側みたい！取って食べたーい。」という。

そのほかに、直径50センチくらいの石の上に、雪がこんもり乗っていると、「和菓子の淡雪みたーい。」

食べたいね」。見たものが全て食べ物に変換されていく。

登りでアイゼンをつけた場所でアイゼンを外す。大きなザックの若い男性がいたので重さを聞くと20kg ないという。20 kg があると歩けないので、荷物を今どきのウルトラライト化しているとのこと。私の持ち物で同じ大きさにしたら 23 kg にはなるのではないか。

軽量化はうらやましいが金もかかる。その人の靴は革靴だった。私以外の人でしかも若い人が革靴を履いているのは非常にめずらしい。日本製だがもう作っていないらしい。

そこからはゆるーい下り坂を延々と歩く。なかなか高度が下がらない。アイゼンを外したので、凍った道の端の雪が残った部分を選んで歩く。慎重に歩いたつもりが、油断して滑ってこけてしまった。いつまでも続くと思われる道もやっと終わる。15:05 ほうほうのていで駐車場着。

やっと終わった。靴を脱ぐと足が軽く開放に幸せを感じる。体はあちこち痛い。道の駅「延命の湯」830 円で体をほぐす。風呂上がりのビール、良く冷えていておいしかった。この後運転する勝又さん、ごめんなさい。

19:30 すぎ、長泉着。天候に恵まれ、すごい景色を堪能し、雪も風もよい山でした。



以上